

「大正8年 洪水で水が浸いた話」

* 『ところ文庫18 常呂町の昔話2』から抜粋・編集

明治31年に岐阜県から移住・入植した藤橋ワキさん・久保田末乃さん・内藤タメさんの会話をを编者／林不二夫さんがまとめたもの。会話には美濃弁が使われています。

大正2年は凶作で、3年も凶作型で、4・5年がまあまあで、6年・7年・10年・11年とずーっと悪かった。その間に7年・8年と水が乗ったはずじゃ。

11年に堤防が破れて、岐阜の方から土佐の方にカボチャがどんどん流れてきた。水は乗った乗った、私どこの台所の上まで乗った。

大正8年の時の話だが、藤橋のおじさんがオタチップ（現岐阜地区の砂丘地帯）において、水が出るとうとうとで、私んたも手伝いに行った。秋だったから豆のスズミ（にお）を押さえて歩くことをやっとんだけど、次第に水が増えてきてプカプカ流れ出し、そのうちに家に帰れんようになる、関谷一水さんのところが通れなくなると言い出したら、水は小島さんところにある種付け所の方に流れて行きだし、いよいよ家に帰れんようになると、もう手伝いどころではなくなると、ほっといて帰ってきたことがある。

その時、藤橋のおじさんた一家がうちへ避難してきて、馬を3・4頭連れてござって、その馬を繋ぐところが無いから、うちの畑に繋いでおいたら、明けの年に馬を繋いだもんだから土がバンバンに硬くなって、種を蒔くのから収穫までたいした苦労した覚えがあるよ。

その後、藤橋のおじさんたが皆でござらして、「何ぼかお米が穫れたから」と、お礼にお米をもらったが、赤くなっていて臭くて臭くて食べられなかった。

私は23歳くらいの時だった。「水が浸くから息子をおぶって本家に行っておれ」と言われて、内藤儀八さんへ避難したことがある。

あの時は大きな水だった。ひどかった。ひどかったよ。岐阜の方からザーと唸って流れてきた。みるみるうちに水が増えてきた。そうじゃ、水がこちらからザーと音がして唸って流れていった。おそがかった（恐ろしかった）よ。

あんたんところはうちより低かったので酷かったじゃろう。大分低い。とにかくわや（め）ちやくちや（だ）だった。水が引いた後は、本当に酷かった。畑は作らなあかんでドボドボの中で仕事をした。芋はすぐ掘らな腐っちまうで、毎日毎日命がけて働いたもんだ。親は本当に苦労しなはったね。私たは親のゆうこと聞いていれば良かったが。

注：大正8年9月19日から22日まで降り続いた豪雨により、23日から未曾有の大水害となる。罹災民28日家に戻る。被害額1,079,033円、罹災民戸数393戸。

被害面積2305町7反、17号・12号の2ヶ所築堤切れる。ライトコロ川水系に流れるが、水勢猛烈にして推量増大のため疏通ならず。土佐3号より常呂川に流入す。土佐部落12〜13戸残すのみ。（聖徳太子碑70周年記念誌）

常呂川の氾濫によって、常呂岐阜尋常小学校校舎に浸水6尺におよび、1週間休校

（岐阜部落開基80周年記念誌）